



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



皆さんと過ごした歳月に感謝

司教として歩んだ12年間を振り返って

前鹿兒島司教 郡山 健次郎



教区の皆様、12年間ありがとうございました。皆様の祈りに支えられた12年間でした。祈ってもらえることがこんなにも安心感を与えてくれるものかと感謝の日々でした。おかげさまで、大過なく職責をまっとうすることができました。そして、司教としての歩みの中で一つの区切りをつけることができました。「自分みたいなのが司教になっても面白いかもしれ

ない」という、およそ信仰者らしくない不謹慎な動機で引き受けた司教職でしたが、やはり計画性のないわたくしには大きな教区目標など掲げることができません

前にも定められていたスケジュールをこなしている状態です。叙階式前は、「司教任命おめでとうございます、でも大変なお仕事ですすよね」とか「よくぞ司教職をお引き受け下さいました」など、いたわりと慰労の言葉もいただきました。最近では、特に以前

です。そこには、司教だった頃の自分とは違う、12使徒の後継者として「キリストの意思を世に示す存在としての司教の使命が私には課せられているのだ」という強い思いです。このような使命を果たすには私は相応しくないと、できれば返上したい、という思いが

が転べば、鹿兒島教区の民全体が転ぶということです。逆に、私が聖性に富む人間になれば、神の民全体は聖性に富むようになる、ということになります。

毎日のミサの中で、司教方は、全世界に奉仕する教皇様と鹿兒島教区で奉仕する私の名前を唱えて、祈ってくださいています。上記した私の小さな気付きは、2000年も前から、司教だけが代表して唱えるミサの奉献文の中で実践されていたものでした。それが今、鹿兒島の地で実効あるものとなるように祈念します。

司教の手紙

鹿兒島教区の司教団、修道者、信徒のみなさまへ、新年を迎える前に、紙面を通してご挨拶と感謝を申し上げます。10月8日の司教叙階式のために、たくさんのお祝いの言葉と、お祈りをいただきました。会場を準備してくださった方々、式に参加してくださった方々、様々な都合で式への参加はかなわなくても、お祈りで支えてくださった方々に衷心より感謝申し上げます。



叙階式後、身辺の整理が整わないまま、現在、司教として事

から親しくしていた人たちから、「司教になられて、どんな感じですか」とよく聞かれます。頂いたこれらの言葉を、吟味するうちに「中野裕明」という個人に向けているというよりも「神様が定めた司教職というもののすごさに驚かされている」というのが現実

ないわけではありません。換言すれば、もつと気軽に司教職を果たしたい、そんな思いは、司教叙階式を境に霧散してしまいました。つまり、鹿兒島教区の全信者と一体感です。全信者を自分の体の一部のように感じるといふことです。換言すれば、司教である私

が転べば、鹿兒島教区の民全体が転ぶということです。逆に、私が聖性に富む人間になれば、神の民全体は聖性に富むようになる、ということになります。

ご挨拶II感じたい「教区の一体感」

鹿兒島教区司教 中野 裕明

第58回市民クリスマス

「いちばん大きなプレゼント
それは小さなイエスさま」

12月9日(日) 14時
ザビエル教会主聖堂

- *歌とお話
こいずみ ゆり (ゴスペルシンガー)
- *音楽
大口明光学園中学・高等学校吹奏楽部
- *チケット
1,000円 (18歳以下無料)



久山神学生誕生

サンカルロス神学院へ
今年4月から教区神学生候補者として教区本部に居住していた久山元太郎さん

が、教区神学生として認められ、この秋かつてアン神父やタム神父、貴島神父が学んだフィリピン人のサンカルロス神学院に入学した。神奈川出身の久山さんは49歳。上智大学在学中にイエズス会に入会、その後、広島学院中等学校などで働いた。1998年にイエズス会を退会し、病院や社会福祉法人施設などで働いた後、鹿兒島教区に司祭職への道を求めて足を運んで来ていた。

霧島彬助祭を司祭に叙階

12月29日ザビエル教会で



学修士)。
大学院卒業後は、しばらくの間、肢体不自由児・重症心身障害者施設「聖ヨゼフ医療福祉センター」(京都市)で生活支援員として働き、その後、2013年8月から教区神学生として教皇庁立聖十字架大学(ローマ)に留学している。2017年6月に同大学神学部を卒業した霧島彬助祭は、現在、同大学教会法学部修士課程に在学中。司祭

ボグスワフ 霧島 彬助祭
司祭叙階式
12月29日(土) 11時
カテドラル・ザビエル教会
司式：中野裕明司教

叙階後も数年間は学業を積んでから帰国する予定になっている。
霧島彬助祭の司祭叙階式は、午前11時から中野裕明司教の司式で行われる。

日本最大の「ドヤ街」釜ヶ崎（大阪市西成区）。日雇労働者の町、路上生活者（ホームレス）の町として知られる。ここに、高齢化も進み増々困窮する日雇労働者・路上生活者を支援する社会福祉法人聖フランシスコ会「ふるさとの家」がある。2018年7月23日から一週間、そこでボランティア活動をした。以下、その日々を通して、考えた事を記す。

やって来たのは「教会」だった

ある有名な神学者が言ったという。「イエスの死後、イエスを信じた人々は、イエスの再臨を、神の国の到来を待ち続けた。ところが、やって来たのは、教会だった」。

つまり、イエスの死から現代まで、この世の悲劇は、教会の来たがゆえと云うのである。

洒落にもならない。とは言え、自虐史観と切り捨てられるわけにもいきまい。この辛辣な皮肉は、見上げて唾した自らに落ちるように、口にした自身を貶めるのだが、一抹の理はある。

ローマ帝国での国教化以降、教会権力の伸長に伴う、十字軍、魔女狩り、異端審問、植民地主義に結託した宣教、新しい学問・科学技術や社会革命・労働運動に対する敵視等々、その権威主義的姿勢が、中世から近代にかけて、世界史に数多の汚点を残したのは知られる通りである。

貧しい人々、弱い人々、虐げられた人々、少数派の人々等、社会的弱者をよりも、どちらかと言えば強者

の側に立つてきた印象は拭えない。第二バチカン公会議を経てようやく、この世と向き合う姿勢も生まれたのだが、資金洗浄、権力闘争、司祭・修道者による児童の性的虐待、聖職者の奢侈等の醜聞は後を絶たず、ジェンダー、LGBT、離婚等の現代の課題にはたえきれない。いまも社会的弱者―「小さくされた人たち」―とは十分に向き合えていないというのが実情だろう。

釜ヶ崎

1960年代の高度成長期。大阪万博もあって労働力を必要とした大阪では、全国各地から労働者が集ま

釜ヶ崎「ふるさとの家」で考えた事

鹿兒島教区神学生

り、建築・土木・港湾事業等の日雇労働に従事した。彼らの寝泊まりする簡易宿泊所が「ドヤ」。これの集積する地域を「ドヤ街」と呼んだが、全国でも最大の人口と規模を誇ったのが、大阪市西成区の北部、大阪環状線新今宮駅の南に位置する釜ヶ崎（あいりん地区）である。

オイルショックに見舞われた1970年代、雇用は減少。失職の鬱憤と新左翼による煽動も手伝って暴動（西成暴動）も頻発した。路上生活者（ホームレス）は恐ろしいといったイメージが定着したのもこの頃だろう。

80年代後半。バブル景気に沸くも束の間、90年代に入るやバブルも崩壊、求人

数は激減し、日雇労働者の生活は困窮する。これにリマン・ショック（2008年）も追い打ちをかけた。

日雇労働は、文字通り、一日に限られた雇用である。安定収入は望み得ない。不況に見舞われ、仕事にあぶれば、生活基盤を失い、路上に。住所を失えば尚更就職も困難となる。貧困の悪循環に陥る。

日雇労働は肉体労働が中心だ。体力に勝った若年層が有利。60年代からこれに従事してきた人々の多くは現在、高齢者になつていく。仕事にあぶれば、先述した貧困の悪循環に。加齢に伴う衰弱や疾病も抱え、困窮は増々極まる。適切な治療や福祉サービスか

らも漏れていく。

ふるさとの家

こうした釜ヶ崎の日雇労働者・路上生活者の支援のため、フランシスコ会司祭ハイシリッヒ神父によって1976年、「ふるさとの家」が設立された。高齢の日雇労働者のための食堂としてスタート。その後、談話室と図書室とが加わった。

バブル崩壊後、92年頃から、路上生活者の増加が顕著に。以後、①安心して昼間に休憩できる場の提供、②生活困窮時の相談先所に行っても相手にされない人のための相談業務―に

傾注。食堂も図書室もやめた。

現在、ふるさとの家は、相談室（医療・生活相談・病院訪問・居宅訪問）、談話室（60歳以上の休憩室）、自炊室（主にラーメンを調理するコンロを常設）、ともの広場（年齢制限なしの休憩室2部屋）、納骨堂からなる。日曜日の朝、談話室でミサがある。

最近では、日雇労働者に限らない、リストラによる失職者、病気のため就業困難な人、年金目当ての詐欺被害者等も利用。ふるさとの家に集うのは皆、「仕事さえあれば」と願う人たち。生活保護の受給を優先に願う人はいない。路上生活者は必ずしも世間一般に言われるような自

堕落な人でも怠け者でもない。経済に都合よく使い回され、遺棄された人々。時代に玩弄された社会の犠牲者である。自己責任などという言葉は、未成熟な社会の無責任な言い逃れに過ぎぬ。

小さくされた人たち

ふるさとの家を拠点に、釜ヶ崎で30年近く活動しているのが、フランシスコ会の本田哲郎神父である。本田神父は言う。

「空腹な人たちに炊き出しすることは必要なこと。大事なこと。だから、差し出す側には良いことをしているという充足感がある。しかし、列に並ぶ側は、辛

+KABAYAN SEKSYON+
Juan Crisostomo: Ang Eukaristiya
 Isinilang si San Juan sa Antioquia noong mga taong 347. Nakilala siya bilang isang mahusay na mangangaral kaya nga tinawag siyang "Chrysostom" sa salitang Griyego na ang ibig sabih'y "ginintuang-bibig."
 "Nais mo bang parangalan ang katawan ni Kristo? Huwag mo siyang balewalain sa kanyang kahubaran. Huwag mo siyang sambahin sa loob ng templo na nakadamit ng yari sa seda pero wala ka namang pakialam sa kanya kung makita mo siyang giniginaw sa labas at walang suot na damit."
 "Siya na nagsabing: 'Ito ang aking katawan' ay siya ring nagsabi: 'Nagutom ako at hindi ninyo binigyan ng makakain,' at 'anuman ang gawin ninyo sa isa sa maliliit na ito na mga kapatid ko, sa akin ninyo ginawa.'
 Anong kabutihan ang meron kung punong-puno man ng mga gintong kalis ang altar ng Eukaristiya habang namamatay naman sa gutom ang iyong kapatid? Pakainin mo muna ang kapatid mo, at pagkatapos, pagandahin mo na ang altar gamit ang kung ano mang natira sa iyo."
 Ang tunay na Eukaristiya ay nangangahulugan ng pagyakap sa sugatang mundo at sa nakapakong sangkatauhan.
 Sa pagdiriwang natin sa pagkamatay at muling pagkabuhay ni Kristo sa Eukaristiya, itinatalaga natin ang ating mga sarili sa misyong yakapin ang pagkamatay-pagkabuhay ng nagdurusa nating mga kapatid. Tunay nga na ang Eukaristiya ang pinagmumulan at ang plano ng misyon.
 Kaya sa bawat pakikinaabang natin sa Eukaristiya, tayoy ay binibigyan ng misyon ng Panginoon na ipahayag ang kanyang dakilang pagmamahal at awa sa lahat ng tao sa mundo.
Katekismo para sa Taon ng Eukaristiya at Pamilya (Fr. Dino Orolfo)

い。たとえ心のこもったものであれ、大の大人が他者から貰って食べるなど、そんな辛いことはない」（2011年7月8日、真宗大谷派円光寺での戦没者追悼法要より）

う。「聖書を深めたいと思ふとき、学者や宗教家に尋ねるより、痛みや現場にあり人々、社会の中で小さくされている人たちの感性に学ぶ方がよい」。また、「イエスの教えは、学問して深められるものではない。むしろ痛みを共感・共有するところから、見るべきものが見えてくる」（同上）。

われわれの加害者性

「路上生活者は必ずしも世間一般に言われるような自堕落な人でも怠け者でもない。経済に都合よく使い回され、遺棄された人々。時代に玩弄された社会の犠牲者である」と既に述べた。これに本田神父の言葉を併せ考えるとき、われわれ自身の加害者性に気付く。

良かれと思つての行いが相手の心を傷付けているというだけでない。快適な住環境に暮らし、高度に発達した交通網に頼り、何不自由のない都市的・文化的生活を享受するわれわれだが、これを整備するために

最底辺で働いたのは日雇労働者たち。いま釜ヶ崎で路上生活を余儀なくされている「おっちゃん」たちであった。ならば彼らの困窮は、自己責任ではない、われわれの、社会全体の問題である。

ときに教会内でさえ、「小さい人ではなく、小さくされた人」という表現で加害者と被害者とに区分、裕福な家庭を後ろめた思いにさせている」などの批判も聞く。富める者の尊大な言い種であること甚だし。厚顔無恥の譏りも免れち続けた。ところが、やって来たのは、教会だった」と言われても仕方あるまい。

われわれの安穏な暮らしが、実は彼ら「小さくされた人たち」の犠牲の上に成り立っているのを知ることが、自覚すべきだ。彼らの哀しみに共感できないのなら、彼らの苦しみに連帯できないのなら、教会は有階級の社交場にも劣る、福音も空念仏にとどまるのである。



列福から10年 今年の殉教祭

川内教会が育んできたレオ列福への思い

「薩摩の殉教者」と称えられていたレオ税所七右衛門敦朝が、ペトロ岐部と186人の殉教者とともに福者に上げられたのは2008年11月24日、長崎市の県営野球場「ビッグNスタジアム」でささげられたミサのことです。このミサには3万人の信者が参列した。

列福に至る経緯は、1981年に来日し、長崎を訪れた教皇ヨハネ・パウロ2世が「日本は殉教者の国であり、彼らを顕彰することを大事にするように」と言われたことを受け、日本司教団が翌年から「司教団が中心となって列福を促進すること」を決めたことに端を発する。その後、日本司教団は1984年、列福特別委員会を組織し各教区でも列福を願う運動を盛り上げるよう訴えた。

これより先、教区では、レオ七右衛門殉教の地・川内の信者たちが主催し「レオの殉教を称える」集いを始めていた。この集いは1985年から教区行事として実施されるようになっていく。

現在の福者レオ七右衛門の「殉教祭」は川内教会が育み、それを教区行事として引き継ぎながら、レオの顕彰とレオの功績の学習、レオの熱い信仰を教区民の模範にする目的で続けられてきていることになる。

今年、福者レオ税所七右衛門殉教祭は、昨年と同様、文化の日(11月3日)に川内港から京泊教会跡地への巡礼と教会跡地でのミサで実施された。集まったのは120人余りの信者たち。参列者少なかったものの、県外からも足を運ぶ信者がいたり、殉教祭に関する案件の問い合わせがあるなど、巡礼委員会(委員長・鄭法鍾神父)が全国にポスター等を発送し広報している成果が見られた。またカトリック新聞社も取材に足を運んでくれた。

今年も巡礼委員会が中心となって、ザビエル祭同様に、鹿児島市のそと日本教会の信仰の基礎となる福者の顕彰となる殉教祭への発展を祈りたい。

省と叙階式で設営、接客、案内などに活躍してくれた信者たちに感謝する集いが11月17日(土)、教区本部で開かれた。

▼死者のためのミサ
死者の月に入った11月4日(日)には、各教会で故人のための祈りがささげられたが、カトリック唐湊墓地(鹿児島市)とカトリック納骨堂前広場(奄美市)には、地区合同の集いとして大勢が集まりミサをささげ、故人の永遠の安息を祈った。

短文



▼愛の聖母園錬成会
11月17日(土)児童養護施設「愛の聖母園」の子どもたちの錬成会が教区本部で開かれた。

▼叙階式感謝の集い
中野裕明司教叙階式の反

▼国分教会 市来房枝
十二年全身全霊傾けて司教の務め全ふされき
(郡山健次郎前司教)

▼俳句
始良教会 川口節子
無心に咲く道端の花ひとすじに

▼短歌
始良教会 川口節子
昇る陽を夕べに沈む真紅の陽神秘の光に向かうひととき

下短信

▼司教が徳之島地区訪問
10月26日から29日にかけて、中野裕明司教は沖永良部、徳之島の教会を訪問し地区の信者たちと交流、現地の声を聞くとともに司教の思いを分かち合った。

皆さんのご協力に感謝します！

とそ子ども食堂スタッフ一同

今年もあつという間に終わりに近づいています。今年も多くの信徒の皆様、また小教区教会と幼稚園からご寄付をいただきました。スタッフ一同、心から感謝いたします。

皆様の温かいお気持ち、小さな子どもたちとその親たちを支えています。

食堂のお客さんに、ほんのわずかの時間だけでも、ほっとできる時間と空間を提供できるのは、皆様のおかげです。ありがとうございます。

日本人の生活はどう推移しているのでしょうか。鹿児島県では子ども食堂の数が今も増えています。決して満たされた生活ばかりではないのです。私たちスタッフも模索しながら毎回開催しています。

幸いなことに、純心短大や鹿児島大学からも学生さんがボランティアとして来てくださっています。感謝

カトリック通信講座

1972年開設以来、入門への第一歩として、また信者の学び直し、黙想の助け、職員研修などにもご活用いただいております。

- <全7講座>
- T001☆キリスト教とは＝日本の宗教観に照らして学ぶキリスト教の概要。
 - T002☆聖書入門〔I〕＝四福音書を通してイエスの生涯をたどる。
 - T003☆キリスト教入門＝キリスト教の秘跡や信仰生活について学ぶ。
 - T004☆神・発見の手引＝人生、自然を通して神の呼び声に耳を傾ける。
 - T005☆聖書入門〔II〕＝使徒の働きとその手紙、黙示録について学ぶ。
 - T006☆幸せな結婚＝カトリックにおける結婚の意味や愛、幸福とは？

T007☆生きること・死ぬこと＝老いや命、旅立つ人に寄りそうケアについて考える。

<受講料> (教材費・税込)
T001～T004 各4,800円
T005～T007 各5,300円

<お申込み>
郵便振替用紙にご希望の講座名・講座番号(T001～T007)をご記入の上、下記にお振込みください。入金確認後教材をお送りいたします。
振替口座番号：00170-2-84745
加入者名：オリエンズ宗教研究所

<お問い合わせ>
オリエンズ宗教研究所 カトリック通信講座
〒156-0043 東京都世田谷区松原2-28-5
TEL03-3322-7601

とそ子ども食堂

ご寄付は下記の口座にお願いします。

☆ゆうちょ銀行：とそ子ども食堂
店名 七八八 店番 788
普通預金 口座番号 3225173

☆鹿児島銀行：とそ子ども食堂
県庁支店 普通預金 3019349

です。今後とも信徒の皆様への援助、ご協力をよろしくお願いたします。

カリタスデーin鹿児島

～神の愛のわざを今・we are caritas～

2019年1月14日(月・振替休日)
会場：ザビエル教会1階ホール

<午前の部 9:30～12:00>
カリタスジャパンの活動の紹介 担当司祭
カリタス支援者の思い 信徒3人

<午後の部 13:00～16:00>
映像(パソコン・プロジェクター)で発表
★カリタスジャパンの援助活動・啓発活動と教区内5団体の活動内容を映像を使って分かりやすくご理解いただくためのコーナーです。各団体の出店ブースを出します。ご自由にお立ち寄り下さい。

カリタス教区担当・川口 茂
TEL080(3958)6810

カリタスジャパン、鹿児島教区共催

会と催し 12月

- 2日(日) 待降節第1主日
- 3日(月) 宣教地召命促進の日
- 3日(月) 日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエル司祭
- 3日(月) 小川靖忠神父叙階記念(1972年)
- 3日(月) 中野裕明司教、丸野六雄神父、関根悦雄神父、萩原義幸神父霊名
- 6日(木) 貴島丈弥神父叙階記念(2015年)
- 7日(金) ヴィンセント神父叙階記念(2006年)
- 8日(土) 無原罪の聖マリア
- 9日(日) 待降節第2主日
- 9日(日) 市民クリスマス・ザビエル教会・14時
- 10日(月) 糸永真一司教命日(2016年)
- 16日(日) 待降節第3主日
- 19日(水) 有馬信茂神父命日(2007年)
- 23日(日) 待降節第4主日
- 23日(日) 松永正男神父叙階記念(1969年)
- 25日(火) 主の降誕
- 26日(水) 聖ステファノ殉教者
- 27日(木) 聖ヨハネ使徒福音記者
- 27日(木) 寝古敦之神父、末吉卓也神父、山口好信神父霊名
- 28日(金) 幼子殉教者
- 29日(土) 霧島彬助司教叙階式・鹿児島カテドラル・11時
- 30日(日) 聖家族
- 31日(月) 教区本部事務所冬期休暇・1月5日

〔司教日程〕

2日連合社年会忘年会、7日大神学院講義(福岡)、9日市民クリスマス、10日災害対策会議(福岡)、12月14日司教会議(東京)、16日紫原教会ミサ、23日志布志教会ミサ、29日叙階式

〔祈祷の使徒会〕

祈りの意向
福音宣教
日本の教会
信仰を伝える人たち
クリスマスに教会を訪れる人のため

中野司教誕生と3人の司祭との別れ 教区報で2018年を振り返る

鹿児島教区の新しい指導者の誕生など2018年は、大きな変化のあった年となった。教区報の記事からこの一年を振り返ってみよう。

2018年は郡山司教の訴え「お隣、ご近所宣教へのチャレンジ」(年頭の言葉)で始まった。

この年に司祭職の節目を迎えた司祭が4人いた。司祭叙階金祝(叙階50年)を迎えたのは永山幸弘神父(教区司祭)とアッシュャー神父(レデンプトル会)、また司祭叙階銀祝(叙階25年)を栃尾泰英神父(高松教区所属)、泉浩

二神父(教区司祭)が迎えて、7月16日(月)にザビエル教会で感謝のミサをさげた。

司祭職の節目を祝う一方で、司祭としての人生を終えた司祭もいた。田邊徹神父、牧山田一神父(以上、教区司祭)、大松正弘神父(レデンプトル会)の3人、それぞれ3月5日、3月19日、10月8日にそれぞれ神のみもとに帰って行った。あらためて永遠の安息を祈りたい。

7月7日には昨年引退届けを提出していた郡山健次郎司教の後任に中野裕明被選司教が決まったと発表され、10月8日に県文化セン

ター「宝山ホール」で叙階式が挙行され、教区は新しい指導者とのスタートを切った。

このほか5月にはローマに留学中の霧島彬神学生が助祭に叙階、また徳之島の池上利男さんが終身助祭と

なった。霧島彬助祭は、この12月には司祭に叙階されることになっている。

また行事では、MEのアジア会議が開かれるなど大きな催しがあったほか、加世田教会が移転により新築・献堂され、また奄美で合同の復活祭が行われるなどしている。新しい指導者と歩む、2019年がさらに充実した年であることを祈りたい。



バザーで宣教と親睦 カテドラル・ザビエル教会

秋になって各教会、教会関係施設でバザーが開かれた。そんな中11月11日(日)、ザビエル教会でもバザーを開いた。物品の販売に、うどん、そばなどの食べ物の提供、会場は大勢の笑顔で満たされていた。

康由神父の聖書教室(8)

頑迷予言(2)

イザヤの受けた命令



神様は単に民を裁くためにこのような預言を与えたのではありません。それは救いの御手を差し伸べるためでした。

つまり、神様は民が頽廃を経たうえで、本当の神様を求め、そのときにこそ真の救いの御業をまっとうしてくださるのです。愚かな人間は真の神様の教えに背き、人間が作り上げた偽りの神を信じることによって罪に浸ってしまふもの

です。このような罪に陥りがちな人間を救うために、神様はインマヌエル、即ち、救い主を遣わしてください。

いつの時代でも生きるために、この世的な価値判断に従うのか、それとも神様を信じ、そしてその御旨を生きようとするのかが神様から問われているとも言えます。

この世的な価値判断の下で生きるのなら、そこには悔い改めも、癒されることも、救いすらもないでしょう。だからこそ神様は、ご自分に対して悔い改めること、即ち、御旨である天の国の福音を信じて生きるのから、そこに救いがあることを伝えるために独り子を遣わされたのです。



月刊『福音宣教』2019年のご案内

年間テーマ——かかわりを広げる

●特別企画 リレー座談「私と、家族と、社会とのかかわり」晴佐久昌英(東京教区司祭) + 香山リカ(精神科医)、関根英雄(東京教区司祭) + 宮台真司(社会学者) + E・ガクタン(淳心会司祭)以降継続

●新連載 「詩編の中の『わたしと神』」青木孝子(聖書学者)、「カトリックの信仰を生きた愛国者・ステファノ山本信次郎」大瀬高司(カルメル修道会司祭)、「典礼と信仰教育—オリエンズ典礼セミナーⅢ」(4月号より)、「『先生、あの偉そうな赤ちゃん誰?』—神様をめぐる対話」小林由加(カトリック学校教員)、「典礼暦とともに、季節の味わい」柳谷晃子(台所料理人)

☆年11回発行(8・9月合併号)、1部600円(税・送料別)

☆年間定期購読料7500円(税・送料込)

<お申し込み>郵便振替用紙にて年間定期購読料をお振込みください。

振替口座番号:00170-2-84745

加入者名:オリエンズ宗教研究所

<お問い合わせ>オリエンズ宗教研究所

TEL:03-3322-7601/FAX:03-3325-5322 URL:https://www.oriens.or.jp

KJJP(鹿児島正義と平和協議会)

通信 12月号

日本カトリック正義と平和協議会会長の勝谷太治司教は、今年の8月、「働き方改革」一括法が成立したことに対して「すべての(そしてカトリック信徒の)企業経営者、政治家の皆様へ」という声明を出した。「働き方改革」一括法の問題点を指摘した上で「政治家の皆様、どうか『働き方改革』一括法の危険に気づき、廃止に動いてくださいますように。企業経営者の皆様、過労死、過労自死の問題に目をつぶらず、

労働者のかたがたへの、いっそうの配慮を、お願い申し上げます。福音や教皇メッセージに込められた意図を十分に読み取り、信徒として相応しい行動を取られますよう、特にお願い申し上げます。」と結んでいる。その声明の中で「働き方改革」一括法の問題が数点指摘されている。

160時間もの長時間労働を行わせることが可能となったこと、②高度プロフェッショナル制度において、雇用者は、一定の働き手、すなわち「高専門かつ高収入」の労働者に対する、残業代を支払う義務、休憩を与える義務、週1回の休みの与える義務などの義務の免除が認められることになったこと、③この高度プロフェッショナル制度の対象となる「高専門かつ高収入」の定義は、厚生労働省の省令によるもので、国会の決議なくその範囲を広げることのできる、きわめてあいまいなものである。これらは、労働問題であ

るが、キリスト者としては、福音の視点(特に非正規・外国人などの弱い立場に置かれた労働者の側)から捉え行動することが必要である。

聖書は、「労働」を神の似姿として創造された人間による、神の創造のわざへの参与、と考えてきた。(創世記2・15参照)それゆえ、神が世界を6日間で創造された後に安息したように、人間も7日目を安息日とすることを大切にしてきた。(創世記2・1)4)また教皇フランシスコは「福音の喜び」において、今日の排他的な経済を痛烈に批判している。「今日においては排他性と格差

▼社会問題の分かち合い

(毎月第三土曜日)

日時:12月15日(土曜日)13時~16時

場所:教区本部

内容:原発・改憲・沖縄問題についての情報交換その他